

## 編集後記

2002年6月はFIFAワールドカップのお陰で梅雨空も吹き飛ばされた感があった。日本代表チームが善戦したことや世界のトップレベルのチームのゲームを時差ばけなしにみることができたことなどで、日ごろはサッカーに全く関心のない人達までも熱狂の渦のなかに巻き込んでしまったようである。ずぶの素人を含め誰も楽しむことができたのは、サッカーにはオフサイド程度のことさえ知っておけば難しいルールがないことやボールを支配しながら短距離選手のように全力疾走しかつすばらしいステップを踏むスピード感やリズム感を目の当たりにできたことなどによるのではないだろうか。

全力でボールを運び、それに対して正面や側面から挑みかかるさまはまさに強靱な体力と勇気のぶつかり合う格闘技である。これほどのぶつかり合いをし、倒れあいながら瞬時に立ち上がってゲームを続けたり、数日の休養でピッチに立っているなどむしろ信じられないことである。どのポジションの選手でもけがをする可能性があるだろうし、90分間の激闘による消耗は全選手同じようなものであろう。中心選手の故障のために涙をのんだ国もあるが、それは一部のスターに頼るチームを作ることの危険性を示すものであり、選手のけがを抜きには考えられない危険なスポーツということになる。

このように危険なゲームが世界中から愛されるスポーツとして行われているのはそれぞれのレベルに応じた選手の体力と精神力に支えられているからなのだろう。しかし、重要な要素のひとつに審判があるような気がした。サッカーでは審判の権威が高く認められており、裁量の範囲が他のスポーツに比べてはるかに広いのではないだろうか。勿論、審判の基準は細部にわたって規定されていることは思うが、出されるイエローカードやファウルの数はレフェリーによって明らかに異なっている。終始にが虫をかみつづいているような人やときどき笑顔をみせる人、感情をあらわにして注意をあたえる人などさまざまでも楽しみひとつであったが、素人目からみれば皆きわめて公平であったし、危険なプレーにはきびしく臨んでいたようにみえた。こういう人達の、選手に匹敵するくらいの運動量やサッカーを愛する熱意や個性あふれる厳正さなどがワールドカップを盛り上げたものにしていくように思われた。

当編集委員会は毎月、長時間にわたって熱心な討論が重ねられながら行われている。日本消化器外科学会雑誌をよりよいものにしようという熱意のもとに、著者に対しては厳しいながらもやさしい心配りがなされているつもりである。

主役はあくまでも著者たちであるが、レフェリーたちもよい雑誌を出すために協力をおしまない所在である。

(小柳 泰久)